

たまいたま 川柳

総会の社告



センブツソウ

平成30年 (2018年)

2月号 (No.699)

日川協加盟

巻頭言

星野ユヅリユヅ

願法みつる

未だ寒い二月夜、満天の星に思いを馳せる。視野の中に存在し得るのは半天なのだが、無数である。しかも、昼間の紺碧の空にも星が在る筈なのだが、意識の外に隠れてしまう。単純なカラクリの世界である。

そんな星の世界に心を寄せてみると、人は脱現実的に様々な想いを仮託することが出来そう。心象であったり物象であったり、仮想の世界を重ね合わせてみるのも面白い。例えば、そんな星々が、人類の過去に昇天した魂達なのではないか・・・と想像することも出来る。

しかしもう少しメルヘンチックに遊んでみて、川柳の世界をそれに見立ててみる。地球を含む天の川銀河で、満天の星が川柳の句であると。日々数多く作られる川柳が、人間の熱気で上昇し、星となり、地球を取り巻く幽玄な空間内で浮遊しているのだ。

そして句の出来映え様々に、きらきらと永らく輝いたり、しばしの間輝いた後にひらひらと散ったり、あるいは流れ星になってぼとりぼとりと零れ落ちたり。

作者が宇宙に放った川柳は、姿形、輝きかた様々に、星々となり下界の観察者の視野の中に生命を託すことになる。この際、論理的な追求は、野暮として。

日日是好

願法みつる

初日の出納め入り日と同じ顔

天災も人災もある地の喜劇

信用のできぬ多弁な論理学

昭和期の英語ハローとグッドバイ

諸行無常老いた百足も蹴躓く